特定非営利活動法人 赤煉瓦倶楽部舞鶴

会報 106 号　平成 31(2019)年１月１日

ＮＰＯ法人 赤煉瓦倶楽部舞鶴　会　報
発行人／理事長　馬　場　英　男
（連絡先）〒625-0062　京都府舞鶴市森 875-2
TEL/090-3281-7539　　FAX/0773-63-9764
E-mail　　brick@iris.eonet.ne.jp

「NPO法人赤煉瓦倶楽部舞鶴」ホームページ　　http://www.redbrick.jp/

新年明けましておめでとうございます。本年も宜しくお願い申し上げます。

1「赤煉瓦ネットワーク横浜大会」に参加して　馬場　英男
2「小江戸“川越”蔵造りの街並み散策体験から」（上）　嵯峨根八郎
3「スタジオ２２」陶芸家トルーシー・グラスの工房を訪ねて　馬場　英男
4「海外から学ぶものはまだある」　小野　章
5　その他　　次回は岸和田大会、編集後記　事 務 局

1.　「赤煉瓦ネットワーク横浜大会」に参加して　　理事長　馬場　英男（会員 No. 8）

平成 30 年 11 月 10 日（土）・11 日（日）に開催された「赤煉瓦ネットワーク横浜大会 2018」に参加した。当法人会員参加は８名で、内一名は東京に住む会員で会場で集合した。初日１０日（土）の大会は、ヨコハマ創造都市センター（ＹＣＣ3 階）で午後１時 10 分から開始された。

基調講演は、「近代遺産の遺し方とみなとみらい 21」と題し、秋元康幸さん（横浜国立大学客員教授・元横浜市都市デザイン室長）で、故・田村明さん（元横浜市技監、元法政大学名誉教授）から始まる横浜の都市デザインの総括的な話が聞けた。

事例報告として「島の煉瓦～瀬戸内町（奄美大島）と五島市（福江島）の煉瓦」と題し、鼎丈太郎さん（瀬戸内町教育委員会）、磯沖淳一さん（五島市東京事務所長）から現在調査中の赤煉瓦施設の説明があった。

次に、今回の目玉企画である「日本赤煉瓦土木番付」がお披露目された。小野田滋さん（鉄道総合技術研究所部長）から、ネットワークから依頼を受け、プレッシャーを感じながらの作業であり、今回は、皆さんからの声を聞いた上で更に充実したものにすることを前提に今回はたたき台として「素案」としたと前置き後、番付を編集するにあたったコンセプトをわかりやすく説明された。その後、参加の堀勇良さん、水野信太郎さんから感想が述べられた。今後時間をかけて番付を充実していくことが確認できた。

懇親会は、大会会場から５分ほどの中華料理店「大陸食堂」で開催され、参加者からの報告など行い交流を深めた。

二日目の見学会は、２コースに分かれ、其々午前９時出発、11 時 30 分解散の予定で横浜の皆さんから説明を受け見学した。

Ａ班は、みなとみらい 21 地区の建物の紹介～臨港パーク～ドックヤードガーデン～新港埠頭～象の鼻テラスにて解散

Ｂ班は、黄金町地区～吉田町～伊勢佐木町～日本大道り～象の鼻テラスにて解散

快晴で温かく心地よい中での見学会で、熱心な解説のためか時間が足りず、両コースともに山下公園の見学をとりやめ、象の鼻テラスで記念写真をとり解散となった。横浜の大会関係者には準備から当日と大変お世話になりました。

横浜大会会場・ＹＣＣ３階で後片付け後に記念撮影

Ｂ班、象の鼻テラスで赤レンガ倉庫をバックに記念撮影

秋元康幸さんの基調講演

奄美大島瀬戸内町の煉瓦

五島市（福江島）の煉瓦

仲原さんから黄金町の取り組みを聞く

舞鶴のまち研が初めて訪れた事務所

赤煉瓦ネットワーク発足式会場ビル

横浜赤レンガ倉庫に別れを告げ帰路に

2．「小江戸“川越”蔵造りの街並み散策体験から」（上）　理事　嵯峨根八郎（会員 No. 138）

ネットワーク横浜大会解散後、以前から行ってみたいひとつ「蔵造り」の街並みがある川越市を訪れました。

前泊地の池袋駅から東武東上線で川越駅まで約 40 分。通勤したことのあるこの路線を 50 年振りに北上、池袋を出て 20 分辺りまで見られた田畑の風景も全面住宅地に変わり、ただ線路は高架の計画があるようですが地平線路のままで、今も 2～3 分毎に走っている超過密路線は変わっていません。

川越市は、かつては江戸時代の城下町として栄え、「蔵造り」と呼ばれる古い建築様式の建物が軒を連ねており、情緒あふれる街並みが特徴です。江戸時代には、川越街道と新河岸川の水陸両道が開かれ、幕府の直轄地になっていたことから「小江戸」と呼ばれ、今でもその愛称で親しまれています。

この古い街並みは 1 平方キロほどありますが、35 万人の川越には現代都市の姿を川越駅の周辺に見せています。

雰囲気の良い街並みを歩くだけでも十分楽しめそうですが何しろ限られた時間での観光なので今回は、散策した中から印象的なものだけをご紹介します。

川越駅は JR との乗換駅で川越の中心です。先ずは橋上駅 2 階にある市の観光案内所に立ち寄り、観光案内図を手に入れます。主要な見どころをマークしてもらって、バスターミナルから 7 番ルートのバスに乗り込みましたがその路線バスルートが城下町特有の路地を走ることが多いので進む方角がよく理解できないまま目的地に向かうのが、たいへん不安でした。

路線バスは古い街並みを辿って走り松江町で下車するも地図を広げては通る人に聞いて確認します。川越太子「喜多院」からスタート。喜多院は江戸城の遺構が残る有名な寺で、境内には、仏弟子をかたどった五百羅漢という石像が 500 体以上もあり見応えがあります。三代将軍徳川家光ゆかりの建物をはじめとする、多くの文化財を所蔵していることで有名のようです。

隣は、お不動様で親しまれる「成田山・川越別院本行院」本山は千葉県にある「成田山新勝寺」に参拝。その前にある川越資料館との間の通りから「川越キリスト教会」の建物を見て川越のメインストリート 1 番街通りまで歩きます。

レンガ造りの教会はところどころにあしらわれた焼きムラが建物全体を落ち着いた雰囲気にさせています。

土蔵造りの館が立ち並ぶ「一番街通り」は重厚な扉が解放されて威圧すら感じます。

古い街並みは電柱も地中化して遮るものはありませんが道幅が狭く、またカギ型・行き止まりもある中へ自動車も通行を許しています。通りは平日にも関わらず混み合い、外国人やレンタル着物姿の人も多く見かけます。

老舗の威厳を感じる創業 260 年の「亀屋」は川越藩御用達の老舗の和菓子店で袖蔵もありました。立ち寄りたい店のひとつです。

お土産の殿堂、川越「椿の蔵」に入店すると 9m の吹き抜けに圧倒です!!

（次号につづく）

３．「スタジオ２２」陶芸家 トレーシー・グラスの工房を訪ねて　　馬場　英男（会員No. 8）

赤煉瓦ジャズ祭やまいづる智恵蔵でのアート活動が縁で知り合ってから、ほぼ四半世紀になるだろうか。当初からの倶楽部会員で陶芸家のトレーシー・グラスの工房をこのほど訪ねた。綾部市老富町有安谷３で「スタジオ２２」を構えている。彼女は人柄も良く、多くの舞鶴の友人からも親しまれている。日本語が堪能で皆に愛される存在である。カナダトロント生れで、カリフォルニア大学２年の 1979 年８月、初めて訪日し奈良の寺に住み込み、禅を学んだとの事。4 年後に再来日し、芦屋の陶芸研究所で焼き物を学んだ際に、在日韓国人の崔華芬（ｻｲｶﾌﾝ）さんと出会う。互いに才能を認め合う仲となり、福岡の陶芸家のもとで薪窯と灰を使った釉薬をともに学んだ。その後、２人で陶芸ができる場所を探した結果、綾部のこの場所にたどり着いた。１年がかりで住家と窯を作ったそうで、建物内に「単窯」と言われる薪窯を、有田の窯作りのプロの指導を受け一緒に作った。古煉瓦を入手し６面を掃除する毎日だったと当時を懐かしむ。89 年秋にようやく陶芸家２人の作陶生活が始まった。生活では合成洗剤、ラップは一切使わず、井戸水、周囲の樹木を大切にしたと言う。釉薬づくりは、樹木の焼却灰を使う。その木も、山から伐るのではなく、廃材を譲り受けるという徹底ぶり。全国各地で作品展を開催し、好評を得たが、崔さんにがんが見つかり、6 年の闘病生活の末、2003 年９月に 50 歳の若さで亡くなった。失意の中で、寂しい毎日を過ごし窯に火を入れるのに１年かかった。その後は、集中して作品を仕上げ、禅の死生観も作品に出てくるまでになった。永年の作陶士や薪の運搬作業などで膝を悪くした。今年 3 月頃だったか電話で歩けない状態だと聞き、たまたま知っていた京都市内の専門病院を紹介した。その後すぐに診察を受け半月板の手術を受けることができ、現在リハビリ中で、順調に推移している様子で安堵している。

今回訪れたのは、知り合いの若手陶芸家を紹介がてら、永年の招待に応えるため訪れた次第である。綾部の「水源の里」の近くとは知ってはいたが、福井県境に位置する辺境の地を初めて訪れた。周りには数件の農家しかなく、一人でまして外国の地で暮らしているのに驚くばかりである。

煉瓦造りのおしゃれな建物の玄関を開けると、煉瓦敷きの土間の広い１ルームで、一面に陶作品を展示、壁には父親の形見の油絵や現代絵画を展示、中央に大きな薪ストーブが目に入る。このストーブで釉薬となる樹木を燃やし釉薬となる灰を集めるとの事である。案内された単窯は想像を超える立派な窯で、30 時間で焼き上げる効率的なもので、壁厚は 70ｃｍはあろうかと思われ、窯内床には無数の穴が鉄板で塞がれていた。トレーシーが何度も言った「100 年は持つ窯だ」は頷けた。小生も数年前から陶芸を趣味としているので、窯詰の際に一緒に焼けないかとお願いしたが、過酷な作業を一緒にやらないとダメと言われた。でも、最後に「馬場さんだけは別よ」と言われたが、リハビリが終えた来年あたりには、一緒に手伝って片すみにでも入れてもらえればと思っている。これまでは、電気窯のみであったので、薪窯で焼くのは憧れであり、今から楽しみである。再会を約束して帰路についた。

トレーシーの自宅兼工房全景

雪深い冬の写真（トレーシー提供）

居間・展示・キッチン

作品展示

単窯の説明・トレーシー・グラス

清らかに流れる川沿いの家屋裏手

［参考資料］京都新聞 2009 年６月８日付「まちに咲いた世界の花」及び、2018 年 11 月 10 日付「アーティストファイル」

４．「海外から学ぶものはまだある」　　小野　章（会員 NO. 9）

昨年は「明治維新 150 年」の年であった。日本は維新以降海外特に欧米諸国から懸命に学び国づくりをした。もはや学ぶべきものはないのだろうか。

さて、舞鶴市が英国ポーツマス市と姉妹都市となって昨年で満 20 年、これを記念し

て「公式代表団」を相互に交換したという。本市は毎年中高生を先方に派遣・ステイさせている。しかし、市民の自主的な交流はこれといって記憶にない。本市のナホトカ市・大連市との交流は、貿易・経済交流という分野が基底にあるが、英国の市との交流は、市民レベルでまちづくりに生かせる分野があるはずである。

井上章一氏は著書「日本の醜さについて」（幻冬舎）の中で、京都市は大きな爆撃を免れたのに、戦後経済的旨みのために市民が自発的に伝統家屋を取り壊し、勝手気ままに雑然とした街並みを作った、と述べる。氏は、全国で見られるこの都市景観破壊を集団志向とされる日本人が行い、個人志向とされる欧州人が厳しい規制をかけ調和のとれた町を維持しているのは、まことに不可思議なこととしている。

その京都の姉妹都市イタリアのフィレンツェの旧市街は、ルネサンス時代のまま景観保全されている。実際に町を歩くとひたすら唖然とする。この体験から現在の京都市長は深く反省し、とり急ぎ看板規制に乗り出したのではないか。

先般TV番組で英国の世界遺産・湖水地方を紹介していた。放映中１本の電柱も見なかった。全て地中化されているのである。あちこちウサギもはね、百年前の景色のまま保全されている。本市の市民もポーツマス市ほかの英国の町を訪問すれば、せめて赤れんがパークの敷地内だけでもなぜ電柱地中化ができないのかという疑問が湧くのではないだろうか。

外国人観光客の受け入れが喫緊の課題だという。まちづくりの本質が問われる時代になった。平成の次の時代こそ、ポーツマス市との市民交流復活で、各般に亘る実のある交流を望みたいものである。

観光客で賑わう赤れんがパーク

明治・大正時代の日本遺産には、電柱・電線は似合わない！！

ポーツマス・ドックヤードの海軍博物館

５．そ の 他　次回ネットワーク大会は岸和田で開催、編集後記　事 務 局

１．赤煉瓦ネットワーク岸和田大会について　平成３（1991）年 10 月に「赤煉瓦ネットワーク発足会」を横浜で行い、その後 1992, 2003, 2011 年に横浜で開催。昨年は７年ぶりの大会開催となりました。この大会を一区切りにして、横浜での大会は終了しました。本年の大会は、大阪府岸和田市で開催の予定です。かつて煉瓦製造が盛んな地区でありましたが、今ではすべての窯が取り壊され工業地帯と化しているそうで、街に残る煉瓦建物や塀などの見学が主になりそうです。舞鶴からは近場の大会ですので、開催日・内容が判明した段階で可能な限り多くの参加者を募りたいと考えています。

２．編集後記　昨年は、稀に見る地震・水害等の自然災害多発と気象熱波現象及びトランプ流ファースト旋風に翻弄された一年でした。自然現象と政治を同一に並べるのは不謹慎か。一方、当法人では新たな活動を見いだせない平坦で淡泊な一年でした。そうした中でも、４月の吉坂保塁砲台跡見学、５月の京丹波・綾部の廃校活用視察、７月の京都伏見の近代化産業遺産視察の実施、11 月の赤煉瓦ネットワーク横浜大会への参加で全国の仲間との交流が出来ました。

本年は、ＮＰＯ法人から任意団体への移行について、今後の活動方針についてなどの課題を検討する年にしたいと考えています。

本年も会の運営にご協力よろしくお願いします。（ｈ．ｂ）

会 員 資 格：　会費納入者（特別会員は除く）。入会金 1,000 円、年会費（個人 2,000 円、法人 10,000 円）。
なお、会員申込用紙は、ホームページからダウンロードできます。　ご寄附も受け付けます。
会費・寄付金等　振込先：　ゆうちょ銀行　口座番号　(01010-6-21476)　加入者名：赤煉瓦倶楽部舞鶴